

レルフ博士の講演を聴いて思うこと

Impression of Dr Relf's lecture

松尾 英輔

九州大学名誉教授, 元東京農業大学

レルフ博士（Dr. Paula Diane Relf, 現在バージニア工科・州立大学名誉教授）は 1993 年 3 月に鹿児島大学農学部へ招へい教授（文部省 1992 年度）としてはじめて来日した。その後数回にわたって来日し、講演やワークショップを通して、植物が人間の暮らしにいかに身近にあつて、大きな影響をもたらした、かつ欠かせない存在であるかを訴えてきた。



特別講演 ダイアン・レルフ氏

今回の講演で博士は、植物とのかかわりのなかで大きな割合を占める園芸に焦点を当て、① 地球という庭の構成員の 1 つである私たち人間の福祉（しあわせ）を可能にして、人間らしく生きている実感を与えてくれる役割を園芸が果たしているという理念のもとに、園芸の効用（恩恵、贈り物）をさらに広く、深く調査・研究して把握するだけでなく、より多くの人に理解してもらうとともに、園芸を容易に実践できるようにするにはどうすればよいか、② 博士自身が園芸とのかかわりを通じてどのように成長してきたか、を紹介した。

後者②は、これまで日本では紹介されたことのない、興味深い話題であった。博士によると、幼い頃はとても引っ込み思案で、身近な動植物をおもちゃにして遊んでいたし、家族との楽しい思い出は森の散歩や動植物との触れあいであった。

そのような原体験をもっていた博士は成人したのち、園芸や植物と人とのかかわることの重要性を啓

発すべく世界中を駆け巡るような行動的姿に変身することになった。そのきっかけになったのは、小学校時代以降のさまざまな園芸経験であったという。このように博士が園芸を通して成長してきた軌跡については、人と園芸とのかかわりを学ぶ多くの関係者には興味深い話題であろうが、本稿での紹介は割愛したい。



前者①は、博士が幼少の頃の原体験を素地として、その後の園芸経験のなかから導き出された園芸哲学ともいえるものであろう。本稿では博士の思想・行動の根幹となっているこの話題を、博士の講演草稿を参考にしながら、筆者の私見を交えて取り上げてみたい。

筆者はこれまで、私たちは日常的にさまざまな行動を行っているが、それらは動物としての本能的（動物的）欲求と、ヒトから進化した人間に独特な創造的（人間的）欲求とに基づいた行動に大別され、そ

本稿は、人間・植物関係学会、日本園芸療法学会合同国際シンポジウム 2019 年度大会 におけるシンポジウムの内容および所感を記録したものである。

それぞれの行動は個体維持のための活動と種属維持のための活動とを含むことを示し、それらを充足したときに私たちはしあわせ感（快感，幸福感）を味わい，人間らしく生きていることを実感するものであることを述べてきた（第1表）。

第1表 私たち人間の欲求と行動の類型

欲求の種類	行動の類型	
	個体維持のため	種属維持のため
本能的欲求 （動物的欲求）	（物や情報を） 手に入れる	子育てをする
創造的欲求 （人間的欲求）	獵（か）る	育てる

松尾（2005）を一部改変した。

これに対して博士は，私たちが Wellbeing 福祉＝しあわせ感を味わう，いいかえれば，人間らしさを実感するのは，次の4つの欲求が充足されるときであるという。すなわち，①Bodies 身体的欲求，②Minds 知性的欲求 ③Souls 感性的欲求 ④Spirit 創造的欲求である。これらについて少し説明を加えておこう。

1. 身体的欲求： 私たちの身体とこれに宿る命を維持することは，動物であるヒトとして欠かせない欲求である。この地球という庭にある植物は，酸素，食べもの，きれいな水，きれいな空気，快適な環境，そして，筋力を発達させてくれる労働などさまざまな形の贈り物を，私たちに与えてくれることによって，その欲求を充足している。こうして，私たちは身体の健康を維持することができる。
2. 知性的欲求： 私たち人類は，地球という庭のなかで進化してくる間に，知性・知的能力（認識力）を磨いてきた。たとえば，ものを観察し記憶する，論理的かつ批判的に考える，理性によって問題解決をはかる，生存と子孫繁栄のためによりよい方法を探す，社会生活を営むなど，知性を働かせて暮らしているとき，知性的欲求が充足されているといえる。
3. 感性的欲求： 自然のなかで生き，動植物とかかわるなかで，その感性・情を発達させて，それぞれの個性を確立してきた。私たちは，人や土地に対する愛着をいだき，美しいものを見て喜び，畏敬の眼で日の出を仰ぎ，鳥のさえずりや自然の音を愛する。見たことのない植物や動物に遭遇したときに怖れあるいは身震いし，芸術や音楽に感動し，新しい命（子供）を生み，その世話をする喜びと楽しみを味わう。これらの事象は私たちの感性的欲求を充足したことを

示している。

4. 創造的欲求： 創造性と探求心は生きてゆくうえでは欠かせないものである。これは，なに，なぜという疑問の回答を探しながら身体，知性，感性が相互作用を起こしていることを意味する。私たちが疑問に対する解決策を見つけ，ものをつくり，新しい発想に喜びを見出すのは，創造的欲求が満たされるからである。

これら4つの欲求すべてを充たしながら，私たちにしあわせ感を与え，人間らしく生きていることを実感させてくれるのが園芸である。その園芸は都市化社会にあっても持続的に可能であり，誰にでもできる。にもかかわらず，利便性を追求する近代の都市化社会での生活は，自然，すなわち，森，草原，庭から私たちを遠ざけることになった。

その結果，木登りや草むらで遊ぶ喜びを知らない，田んぼに育っているイネと米とが結びつかない農学部のある学生がいる，ジャガイモやサツマイモが畑ではどんな姿で育っているかを知らない，植物がなければ肉を得ることはできないことを知らない，というような市民を生み出すことになった。こんな状態では，環境を守る必要性など理解できるはずがない。

このように，空気の存在に気付かないのと同じように，園芸の重要性に気付かず，また，知らないし，考えようもしない市民が圧倒的に多い。かかる現状を打破して，人間に対する園芸の意義・役割をより深く理解し，社会全体に広めて行くにはどうすればよいか，と博士は問いかける。

その回答は，「資金が要る」という言葉に尽きる。資金を得ることは，成果がコストに見合うかどうか，すなわち，園芸の機会，場所，教育，実践に投資する以上の節約あるいは利潤が得られることが明らかになってはじめて可能になる。

では，その資金はどのように得ることができるのであろうか。

まず，研究と実践に基づいて園芸の効果（恩恵）があるという証拠を明らかにし，それらを印刷して衆知することはもちろんであるが，これまでの研究に加えてもっと研究を進める必要がある。それらの成果を，その恩恵を受ける市民，実践している専門家，利益を受ける企業，制度にかかわる行政が共有し合うことによって資金を得る目途が得られる。

次に，家庭，公園，学校，地域社会などで，さまざまなタイプの園芸が行われるが，それを支援する資金を見つけることが必要である。園芸の効果はさまざまであるが，それをする場所がない，植物を育てたことがない，情報がなく，どうすればよいかわからない，という人たちに対して，どんな場所を，どのように準備すればよいか，どのように情報を

発信する機会をつくるか、などの課題に直面する。これらを実現するには、活動資金が欠かせないが、それをどのように調達すればよいかを考えて欲しいと、博士は訴えている。

日本における園芸研究はあいかわらず生産科学としての要素が強く、そのための生物現象の解明が主流となっている。これに対する生活科学としての園芸、すなわち、人と園芸とのかかわりを取り扱う領域では、園芸の効用の解明、その療法的活用に関するものが多く、教育・文化や生活園芸の啓発・普及に関する研究は少ないように見受けられる。

博士が指摘するような、市民のしあわせをねらいとした園芸の活用（園芸福祉）を理解して指導できる人材やその場を確保できる部署にいる人材の教育、さらには園芸福祉の普及を推進できるさまざまな領域の人材を育成することなどを組織化し、それを総合的にとらえて推進するためには資金が必要であるという考え方は、日本ではきわめて希薄であるといわざるを得ないようである。博士の講演は、日本における関係者もこれらを考えて園芸の福祉的活用を推進しなければならないという忠告であったといえるのではなかろうか。

参考文献： 松尾英輔．2005．社会園芸学のすすめ—環境・教育・福祉・まちづくり—．農文協．東京．

